

1916(大正5)年8月15日の大火と街並み形成(再考)

鈴木智子

I. はじめに

先に筆者らは「1916(大正5)年8月15日の大火と街並み形成」と題して、十勝郡浦幌町市街地の街並みと大火について本誌第17号にその知れるところを報告し、若干の考察を試みた(鈴木・後藤、1981)。この報文の中では、1916年当時浦幌市街に居住していた人々を街並みとともに復原し、焼失家屋の推定を示したものであった。浦幌の大火は2年後の1918年にも発生しているが、村に与えた影響は比較にならぬほど前者が大きく、その後消防組が組織される契機となるなどその後の浦幌村の行方に多大なインパクトを与えたものであった。

そうした意義をもつこの大火について、筆者らの報文を読まれた札幌市在住の波佐孝氏(元浦幌町字本町在住)より、極めて重要なご教示とご示唆をいただいたので、ここに紹介するとともに、改めてこのことについて考えてみたい。

II. 大火の日現在の居住者

①久保田要吉(久保田運送店・久保田旅館)

久保田要吉(先代)は新潟県の出身で、根室和田村に屯田兵として入植。その後、旧生剛村市街に居住し、大工や旅館を営業していた。1903(明治36)年浦幌駅が開業すると直ちに、現在の米沢一喜氏宅の付近に移転し、旅館業を営むとともに後に運送業も始めた。かたわら村会議員・商工

会長・消防組頭・衛生組合長・浦幌神社氏子総代・淨福寺檀家総代などの要職を歴任している(間宮、1949)。

②倉庫

③木越栄作

石川県河北郡津幡町出身。食糧・雑貨・酒・煙草・豆腐・魚などを商っていた。

④下浦幌駅通所(吉川一馬)

福島県出身。北海道庁の役人生活後、旧生剛村に転住し、下浦幌駅通所を開設。浦幌駅開業とともに現本町吉川利昌氏宅に転居した。その間、生剛外二ヶ村総代人・村会議員などを務めた(間宮、1949)。

⑤丸大座・倉庫(高室廣助)

⑥真木某

木材店・現「かし和屋」付近。

⑦飛田辰次郎

愛知県出身。幕別町から浦幌へ転じ開墾に当っていたが、1912(明治45)年現在の本町飛田林平氏宅に転居した。雑穀仲介業を営んでいた。消防組頭も務めている(間宮、1949)。

⑧相場政衛(金物商)

長野県出身。足寄を経て浦幌へ転住。1914(大正3)年刊『十勝案内』には「和洋・金物・雑貨商」として巻末に広告が掲載されている。現、本町石田バーマ店付近。なお、同氏は、大火後足寄町に戻り、1930(昭和5)年ブラジルに移住。同

目 次

1916(大正5)年8月15日の大火と街並み形成(再考).....	鈴木智子.....	2
〈座談会〉住吉神社と加賀団体.....	後藤秀彦・佐藤芳雄編.....	6

〈表紙写真説明〉 明治末期の生剛村大字下浦幌の景 『十勝国産業写真帖』に掲載されたこの写真の手前には牧場、中央に浦幌川、遠くに汽車の通過が見られる(後藤秀彦)

氏子息相場真一氏は在伯北海道協会長、南米銀行頭取などの要職を務めておられる。

⑨根本高三郎（呉服商・時計修理）

宮城県出身。妻は日本髪の髪結い。現本町石田ペーマ店付近。昭和に入り、現そうご電器店の付近に転居する。

⑩関口清吉（大工）

大火の後、陶器類の販売。

⑪豊吉種吉（運送業）

⑫宮部甚八（床屋）

⑬高沢 某（柾屋）

⑭山川 某（豆腐屋）

⑮不詳（仏具屋）

⑯川口忠助（雑貨商）

『十勝史』（酒井、1907）の巻末広告には「生剛村大字浦幌 雜貨商川口忠助」とある。現本町高室栄三氏宅付近。

⑰佐野継次郎

岐阜県出身。消防組小頭、東禅寺檀家総代などを務める。住居は、現本町樹井時計店付近。

⑱⑲料理店 辻本清美

（株）浦幌印刷付近。

⑲青木里き

岐阜県出身。

⑳川畠嘉作（④鍛治屋）

㉑鈴木 某

㉒永沼 某

㉓茂木商店（餅・まんじゅう）倉庫

㉔美濃屋（旅館業）

佐野初経営。

㉕山形屋六郎衛門（雑貨店）

㉖君貞次

江別から転籍、現橋本旅館付近。司法書士、代書業を営む。旅館は妻が営み、同氏は政友会浦幌事務所を開設。開村以前から十勝郡各村中川郡旅来外十四ヶ村総代人などとして村政の中心に参画していた。また、土田農場の経営にも参画していた（間宮、1949）。

㉗高室廣助

広島県出身。1914（大正3）年、現本町桑原新聞店付近に移住。丸大座の所有者。広大な屋敷を所有し、雑貨・米・食糧品・煙草・塩・呉服などを商い、雑穀の仲介などをしていた。

㉘劇場

㉙曹洞宗浦幌説教所

現東禪寺の前身。大正の初期に設置されていたと伝えられる。

㉚清水金次郎（木材人夫頭、又は大工）

大火の火元であること以外詳細不明。

㉛山形屋（雑貨業）山形六郎衛門

ここは大火後、現本町の石田東栄堂付近。1914（大正3）年発刊の『十勝案内』には今の屋号で「国定教科書、学用品、新聞」を扱う「山形本店」として広告が掲載されている。なお、ここでいう新聞とは「北海タイムス」（現・北海道新聞）である。

㉜大屋 某

郵便局長。

㉝錢湯

佐野初経営。

㉞勝田秀一（㉖ソバ屋・料理店）

佐賀県出身、現本町齊川運動具店付近。

㉟杉江 某（手打ちソバ屋）

㉟不詳

㉟中山岩吉（菓子店）

現本町中山薬局付近。

㉟脇田貞吉「飲食店・酒・焼酎・ソバ屋」

岐阜県出身。

㉟森 某（建具屋）

㉟中山熊次郎

山形県出身。

㉟金田庄次郎（真崎木材店帳場）

㉟守屋晋（獣医）

香川県出身。当初旧生剛市街で開業していたが浦幌へ転居する（安藤・後藤、1978）。

㉟役場官舎

村助役（川崎八十八）、収入役（宅美熊吉）ほか1軒。

㉟井上吉衛

第10代村長。

㉟齊藤 某

医師。

㉟役場庁舎

㉟的野

浦幌巡査駐在所巡査。

㉟北村卯吉

雑貨商。

㉟借屋

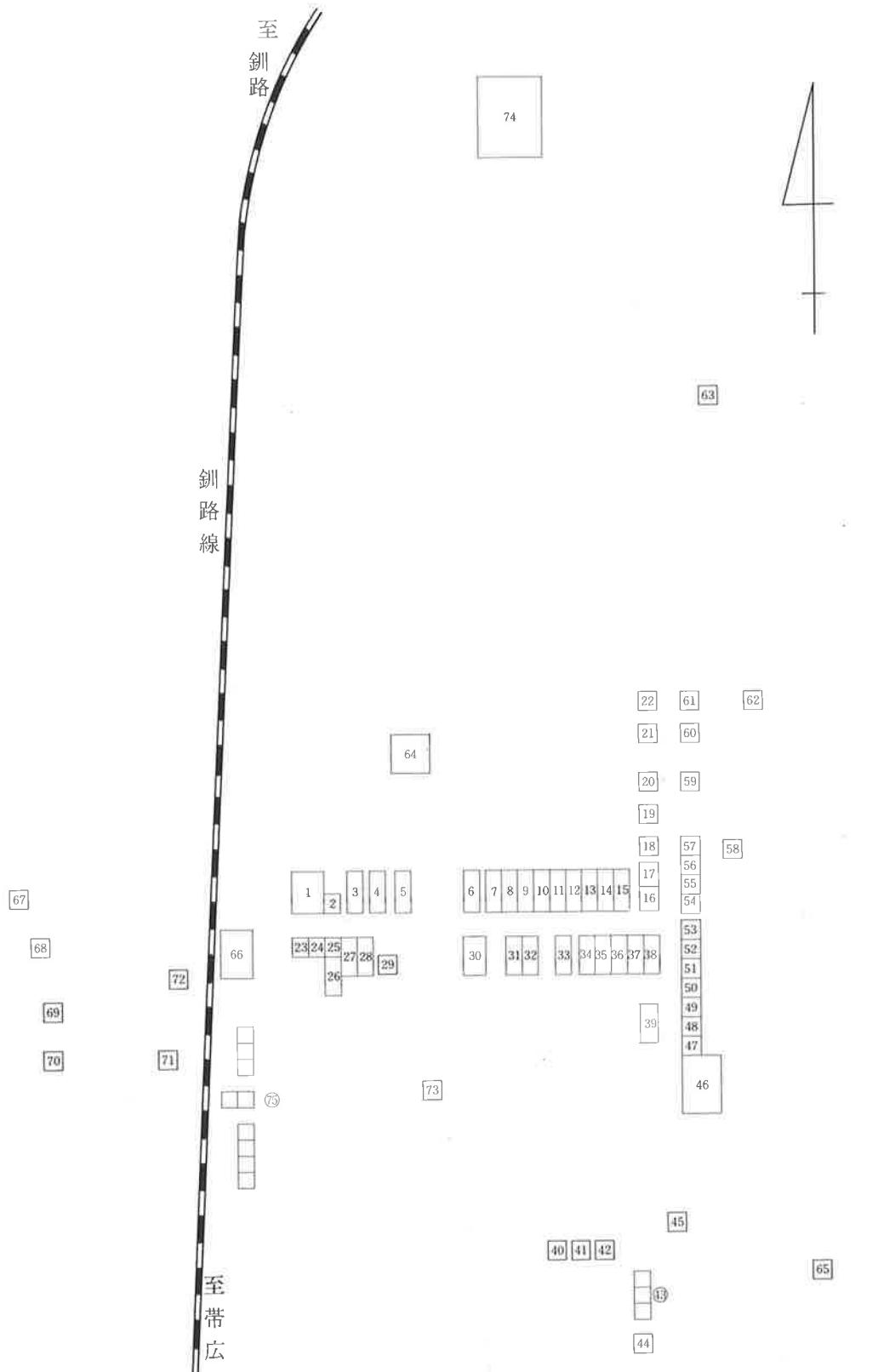


Fig. I 1916 (大正5) 年8月15日の浦幌市街の街並み

- 中山熊次郎商店経営。
- ⑤〇藤川富士次
雑貨商。
- ⑤①黒川常行（黒川松山堂）
小樽新聞・薬店。
- ⑤②石田竹次郎（△呉服商）
藤丸の一番番頭。
- ⑤③田中長松
呉服商。
- ⑤④佐々木卯三郎
豆腐屋。
- ⑤⑤北内 某
料理店。
- ⑤⑥齊藤 某
小間物店。「水汲み齊藤」と呼ばれ、市街地に水を運搬し、販売していた。
- ⑤⑦大和田亀吉
大工。
- ⑤⑧渡辺 某
- ⑤⑨三原亀太郎
金物商・鍛冶屋。
- ⑤⑩渡商店
後に丹羽源弥氏転住。昭和初期になって常室より飯山政吉が移り住み、木工場を経営する。
- ⑤⑪澤田己之助
料理屋。後に一心亭（遠藤氏）。現吉野家。
- ⑤⑫川原 某
⑤⑬笹原 某
雑貨・文具・学用品等の販売。
- ⑤⑭真宗本派本願寺派浄福寺
1905（明治38）年設立。1908（明治41）年、現在地へ移転（間宮、1949）。
- ⑤⑮真宗大谷派謙敬寺
1897（明治30）年設立。1912（大正元）年現在地へ移転（間宮、1949）。
- ⑤⑯浦幌駅
1903（明治36）年開業。
- ⑤⑰田中 某
⑤⑱大宮 某
博徒。齊藤源藏氏が後に住む。
- ⑤⑲齊藤源藏
⑤⑳菅野 某
⑤㉑齊藤織平
故齊藤有氏の実父。
- ⑤㉒囚人看守舎
⑤㉓小野寺倉之助
⑤㉔第二浦幌尋常高等小学校
⑤㉕鉄道官舎
北側から駅長宅、助役宅、保線分区長宅の3戸。駅務及び転鉄係、独身寮、給水係、電工、線路工手の官舎が続く。

年 度	村 名	出 寄 留 者				入 寄 留 者			
		戸 数	人 口		計	戸 数	人 口		計
			男	女			男	女	
1906	生剛村	23	94	75	169	118	476	287	763
1907	〃	30	118	93	211	153	581	383	964
1908	〃	38	170	116	286	250	771	549	1,320
1909	〃	29	36	35	71	302	910	702	1,612

Table I 1906～1909年の出入寄留者戸数及び人口 (間宮、1949)

年 度	村 名	本 稽				本 稽 (前年末現在)			
		戸 数	人 口		計	戸 数	人 口		計
			男	女			男	女	
1906	生剛村	506	1,371	1,322	2,693	613	1,380	1,103	2,483
1907	〃	521	1,397	1,377	2,774	506	1,371	1,322	2,693
1908	〃	520	1,487	1,387	2,874	521	1,397	1,377	2,774
1909	〃	537	1,585	1,504	3,089	520	1,487	1,387	2,874

Table 2 1906～1909年の戸数及び人口 (間宮、1949)

以上のように75戸以上の民家・公共建物・社寺が判明した。この家並みの配置は、Fig. 1のとおりであるが、このうち、この大火の火元となった清水金次郎については、前述したように不明な点が多い。北海道未開地処分法制定前後に、自然集落として成立した旧生剛市街地と異なって、浦幌市街地は、浦幌駅開業に伴う、いわば人工的な集落である。駅前を中心とした市街地がT字状に形成され、さらにその周囲が市街化して膨張していくパターンを示している。こうした時期の集落の人口は自然増以上に社会増が優先し、寄留者も増加する。1916年前後の出入寄留者の数は不明であるが『浦幌村五十年沿革史』(間宮、1949)によれば、1906~1909年の出入数はTable 1のとおりである。また、同時期の戸数及び人口はTable 2のとおりである。この2表を見てみると1906年で本籍のある人口のほかに、差引き 594人が寄留者として入村している。これらを各年ごとに集計してみると、

1906年	594人	22.06%
1907年	753人	27.14%

1908年	1,034人	36.00%
1909年	1,541人	49.89%

となる。また、本籍のある人口に対する寄留人の割合いも前記のとおりとなり、本籍のある人口のほかに1909年では5割増近くの実人口があったことになる。清水金次郎もこうした寄留人のひとりであった可能性があり、実体がなかなか把えられない理由のひとつとなっている可能性がある。

(浦幌町郷土史研究会員)

引用文献

- 安藤龍逸・後藤秀彦(1978)「生剛村旧市街の街並み形成について」『浦幌町郷土博物館報告』12 浦幌
 酒井章太郎(1907)『十勝史』 帯広
 鈴木智子・後藤秀彦(1981)「1916(大正5)年8月15日の大火と街並み形成」『浦幌町郷土博物館報告』17 浦幌
 間宮不二雄(1949)『浦幌村五十年沿革史』 浦幌

〈座談会〉

住吉神社と加賀団体

後藤秀彦・佐藤芳雄・編

この記録は、浦幌町字稻穂に所在した住吉神社が八幡神社と合祀される際に、地元加賀団体の末孫の方々の要望により聞き書きしたものまとめたものである。収録後、11年を経ているが加賀団体の来歴・稻穂開拓・稻穂の獅子舞など貴重な内容が含まれているのでここに公表するものである。

収録日：1973年3月28日

聞き手：後藤秀彦・佐藤芳雄

出席者：竹田才一・舟田善幸・鉢木明男・大谷道男・大谷郁・中井祥憲

会場：浦幌町字稻穂 旧住吉神社々殿

問 本日はお招きをいただき誠にありがとうございました。住吉神社が八幡神社と合祀して、新たに稻穂神社として創建されると聞き、この機会に稻穂地区、特に加賀団体の開拓時代の様子などもお尋ねしたいと思います。私、後藤と申します。又、同行した者は佐藤芳雄と申します。どうぞ、よろしくお願ひ申し上げます。さて、この加賀団体は名前からして石川県出身者であるということ

は明白ですが、当時こちらへ来られた方は長男の方が多いのですか。

答 先々代のこととなるとよくわからない。長男の方も来られたと思います。昼にうちの婆さんから聞いたのですが、昔の内地のことばで愛称の「ギャンサ」「クザエモン」ということばがあります。またクニの訛りで「アジキ」ということばもあります。アジキはここでは舟田善幸さんを意味